

2 巨乳パイズリで容赦無しの立ちチン比べ。周りは実は全員デカかった！ 悲劇の円陣。希望の口業。

立たせる、といわれてもすぐに立つわけでもない。  
相手が一人で、立って入れろというならまだしもだ。  
ただ、大きさを測らせてでは無理がある。

「これは無理だな。立たないよ」

伊藤。

「伊藤、がんばれって」

「いや、立たないんだから。なあみんな」

「そ、そうだよな。この状態で立ったら変態だって」

普通ならそこでこの話は終わりだろう。

後は適当に温泉に入って解散。

が、女子社員たちは酔い、熱い所で騒いで興奮状態だった。

35歳ほどの一人が、真ん中辺りにいる五位の男に近付く。

伊藤の同期で、25歳である。

「え、何か……」

「立たないなら、立たせてやるよ。チ○コ貸せ」

「あ、握らないで……」

掴み、態度の荒さと裏腹に優しく揉み、空いた手の指先に肉玉を載せて波打つように刺激する。

「おお、結構立派じゃん」

「そ、そんな……無理やり」

「男は嫌なら立たせなきゃいいんだよ」

逆レ○プでもしようとしているかのようなことを言う女子社員。

周りを見る。

目の前で手コキ玉揉みを見せられ、半立ちのものも出始めていた。

萎えないようにその女はまだ人差し指と親指のリングで一物を掴み、根元から首まで巧みな上下運動を繰り返す。

「萎えさせんなよー。ほら手コキ手コキ。でも、出すんじゃないわよ」

「や、やめて、動き、動きっ……」

「カチカチじゃん、若いっていいわ。旦那のはバナナみたいな固さなのよね」  
腰をくねらせる男子。しかし熟女の巧みな手コキから離れられない。  
出るのも間近かと思えた。

「みんな、元気でできたね、さ、比べようか」

いわれて、元気になっていたものを隠そうとする男子たち。  
それに、女子社員がまとわりつく。

「隠しちゃダメよ」

「ほら、おチ○チ○見せなさい。さっきも見せたでしょ」

「あら、これ順位変わるわよ」

萎えたら控えめな一物ばかりだった。

それが、元気になると様相が変わる。

「やだみんな、結構立派なモノ持ってるじゃない」

皆、平均以上のサイズを見せていた。

萎えて九位だった後輩が、五位に浮上する。

真っ先に脱ごうとした理由もわかるというものだった。  
だが。

「あれ、伊藤くん……」

「小さいまま？」

「なんだ、立ってないんだ」

「でも、上向いてるよ？」

不思議そうな空気。

それが徐々に変わる。

「そ、それじゃ男子円陣組んでみようか」

肩を震わせる熟女。

手コキはやめているが、握ったままだ。

それを引っ張るようにして、他の者も誘導する。

円陣を組み、肉棒を突き出す形。

隙間から、女子社員が中を覗いていく。

「見てよあれ、伊藤くんの！」

「超小さい、一人だけ子供みたいなんだけど！」

「やだー、残酷よこれは、巨根の中に租チンが一人って！」

「しかも全員ビンビンでいいわけ不可能って！」

笑ったり、抑えたり、また笑うことを繰り返す女たち。

酔って騒いでいるので相当なテンションだ。

「あ、あの。そろそろ水着着ても……はうっ」

「なにいつてるのよ、そんなでっかいチンポ入らないでしょ？ 海パンにはさ」

「そうよ、だから別の所に入れちゃいましょうよ」

左右から群がる女たち。玉や竿を握り、逃がさない。

ほとんど素面で、フル立ちながらも引いていた男子たちだが、こうなっては流れに乗るしかない。

一人、円陣に取り残される伊藤。

「ちょっと、伊藤はいいのかよ」

「え、だって小さいし」

「剥けてないしねえ。ありゃまずいわよ」

「周りは立派なモノばかりだし。そうだ、西俣が相手すれば？」

チラ、と伊藤を見る西俣。

「ま、無理にとは……」

「空いてるなら、私が行くわ」

伊藤に近付く。

「伊藤、こっちに来いよ」

「先輩、俺なんか放って置いてくださいよ」

「なんでだよ。さあ来いって」

引っ張られる。

女子に強引にこられたら仕方ない、というパワーバランスに慣れきっている伊藤はこの場でも引っ張られる。

途中で、寝転がった後輩とすれ違う。

すれ違う、といていいのか。

股間に三人の女が群がっていた。

「あー、大きいチ○ポ、大きいチ○ポお」

「んふふ……ココ……こんなになってる……おチ○チ○」

「旦那のと段違いよお。憎いわ、金ちゃん食べちゃう」

左右から巨大な肉茸を舐めあげ、一人が真ん中から鶉の卵のような肉玉を舌で刺激する。

後輩は大股開きで舌を突き出し、両手をボクサーの防御のように脇を引き締めて体を強張らせている。

慣れた女三人に攻められ、とても自分から何かできる状態ではない。

一方で、相手が運良く一人なら男が攻める側の場合もあった。

「おチ○チ○がッ……奥をぐりぐりってッ……！ んああ！ ふあっ！！」

「ウッ……うあッ！ しっ、締まるッ……！！」

バックから襲い掛かり、必死の形相の男。

むっちりとした尻肉を後ろから強く掴んで思い切り腰を突きたてガツンガツンと快感を食った。

お互いの粘膜が絡み合うたびにピチャピチャといやらしい音を発しながら淫水を周囲に撒き散らしていく。

温泉は完全に乱交の場と化していた。

貸切だからいいものの、人がいないだけで普通の状態なら問題だっただろう。

「ほら、こっちだ」

近くで伊藤とは段違いの九位が寝転がり、腰に女を乗せ、顔にも乗せている。

「ほらほら、お尻舐めな」

「いい、いい騎乗位よ、おチ○ポ大きいから、本当に馬に乗ってるみたい……」

チラチラ見える一物は、皆伊藤より巨大。

だから自分は見向きもされない。

その状況に、伊藤は絶望していた。

大きさではないとずっと思おうとしていたが、酔ってわけが分からなくなった女たちの本音はどうだ。

「伊藤」

温泉の端のほうでやっと止まる西侯。

振り返り、肩を掴む。

顔を近づける。

「私は、並の大きさの方がいいと思う」

驚く。

そんなことをいいに端に来たのか。



と、西侯の顔が  
赤くなっているのに気づいた。

「でも、小さくでも  
相手が好きなら別に気にしないぞ」

「それ、どういうことですか？」

「こういうことだよ」  
手を離し、しゃがむ。  
口を空ける西侯。  
涎が上唇と下唇の間に糸を引く。  
舌を突き出し、  
その上に伊藤を乗せる。

と、西侯の顔が赤くなっているのに気づいた。

「でも、小さくても相手が好きなら別に気にしないぞ」

「それ、どういうことですか？」

「こういうことだよ」

手を離し、しゃがむ。

口を空ける西侯。涎が上唇と下唇の間に糸を引く。舌を突き出し、その上に伊藤を乗せる。

「あっ」

西侯の頭に手をやり、腰を引こうとする伊藤。

その尻に、西侯の腕がしがみつく。

温泉の端である、後ろは壁だ。

下がれない。

西侯の口の中で、小ぶり過ぎる物が弄ばれる。

持ち上げられ、左右にビンタのように弾かれ、口の上や、下に押し付けられる。

自分のモノでは口の中などスカスカだと思っていた伊藤は、先が口の上下につく事に内心驚く。

「お、俺のでも、結構」

下を見ると、西侯が微笑む。

小さいことは小さいが、それでも問題はないとわからせようと、そんな動きをしていた。

ゆっくり、肉棒を柔らかい舌で圧迫する。

グイグイと押さえつけている間に、反発がおき始める。

円陣を組まされ、差を見せ付けられたときから縮み上がっていた肉棒に再び血の気が戻ってくる。

ギンギンに立つ。

口を離す西侯。今度は皮に包まれた一物から口まで涎が垂れる。

「口の中で、三倍ぐらいに膨らんだぞ、お前のチ○ポ」

「そんなには……」

再び啜える。

舌で器用に皮を剥く。

普段洗っているが、今日はまだ洗う時間はなかった。

風呂に入っていきなり脱がされ、今に至るのだ。

「か、皮の中は綺麗じゃ……」

構わない西俣。

そもそも一物が洗ったぐらいで綺麗になるかと思うし、ここで迷わず舐めてやるのが伊藤の心を癒すとも思った。

冗談のつもりだったが、酷い展開になってしまった。

伊藤が人並みなら、こうはならなかつたらう。

まさかダントツの短小の上に包茎とは思ってもいなかつた。

西俣の考えでは、ちょっとエッチなイベントに過ぎないはずだつたのだ。

それで関係を進めるきっかけになればと。

セクハラでちょっかい出して脈があると見せてきたつもりなのに、動かない伊藤に発破をかけたかつたのだ。

剥き出した先端部をゆっくりと舌で撫でる西俣。

本当に小さい。

舌で触つても、そう思えてしまう。

そんなものを皆の前で出して、どう思つただらうか。

正直、そんなにサイズに拘る気持ちか西俣には分からない。

だが、辛かつただらうと想像することは出来た。

自分がああいう場を作つてしまつたせいで、伊藤が苦しんだのだ。

「先輩？」

涙が流れるのに、伊藤は気づく。

包茎の中を舐められ、愛のような物を感じた。

だが、それで泣いているなら、義務感からの慰めなのか。

と、口を離す西俣。

彼女が何かいう前に、しゃがむ伊藤。

「先輩、もういいんです」

「私のせいで、苦しめたな伊藤」

口を開き、首を捻る伊藤。

今ひとつ、西俣の言葉はよく分からない。

「先輩のほうでしょ？ 洗つてないの舐めさせられて」

「そんなことどうでもいい。信頼する人間にだけ見せたかつただらうに、私のせいで」

ポロ、と大粒の涙が流れる。

「先輩のせい？」

確かに、風呂でフルチンの流れの中で、西俣は強引に先頭を走っていた。

それを気にして泣いているのか。

自分を傷つけたと気にして。

「先輩……俺、気にしてないですよ」

そんなわけもないが、ずいぶんましになった。

「先輩、みんなうるさいから、部屋に行きませんか」

「わ、私でいいのか？」

しゃぶっておいて今更、と思わないでもない。

が、状況が状況だ。

たとえば、横で熟女が前後から口と女陰に一物をつきこまれて串刺しでほとんど白目を剥いている。

余所では、一人の女に出し入れしつつ、別の女の股間に顔を埋めている男もいる。

こんな状態では、しゃぶるぐらい勢いで出来るかもしれない。

だが部屋にしげこむとなると別だ。

「私なんて全然……」

「先輩はオッパイも大きいし、優しいじゃないですか」

「馬鹿……オッパイばかり見るなよ」

言って、巨乳を伊藤の胸に押し付け、押しつぶすように手で彼を抱きしめてひきつける。



体験版終わり

楽しんでいただけましたか？ よろしければ、続きを製品版で。